

寄稿 日本ギリシャ協会 会報 第18号

三千年前のジェスチュア

ガラ 3:1 他

1. ギリシャ人の “No”

シンタグマ広場に面した Delphi というその小さな食堂に入って、恐る恐るローストチキンを注文した私は、白髪まじりのボーイの奇妙なジェスチュアにまず度胆を抜かれた。ゆっくりと顎をしゃくり上げるように……と言うより、その端整な鼻を天井に向けて振り上げるようにして、給仕人は無言で私を見おろしたのである。

語学レコードで練習して来た料理の名を、私はもう一度、はっきり区切って発音しながら彼に告げた。“Kotopoulo psito” 給仕人の反応は全く同じであった。それは、日本人なら「ウン」とうなづく時にする動作をちょうど逆に、頭を後にのけぞらせて、言わば「ンウ」という感じに、彼は私がそれまでに見たこともない不思議な仕草を見せた。

その「ンウ」というジェスチュアがギリシャ人の “No” であることを知ったのはその後間もなくであったと思うが、このジェスチュアの歴史的重みを私がショックのように受け止めたのはその後何年もたって、ホメロスの叙事詩の下調べをしていた時である。ananevo (拒否する) という動詞の語源を私は確かめていた。

ana は「上へ」で nevo (古典読み neuo) は「うなづく、合図する」。従って ananevo は「上向きにうなづく(?)」ことになる。Liddell & Scott の大辞典によると「頭を後へのけぞらせて拒否を表わす、拒絶の身振りをする、拒否する、断わる」とあって、ホメロスやヘシオドスからの例文が並んでいた。

そのひとつ「イリアス」第6巻の311行にはヘクトルのために執成して、何とぞ敵の勇士ディオメデスの槍をへし折って下さいと祈る女祭司テアノの懇願を、パラス・アテナは「首を後に振って拒み続けた」とある。“Aneneve dhe Pallas Athini”（ギリシャ人の発音による）。

その瞬間、私はアテネ国立考古学博物館で見た白いパラス・アテナの立像が、その美しい顎を静かにしゃくり上げて、あの「デルフィ」のボーイと全く同じジェスチュアをするのを見たように思った。そしてそれと同時に、プラトンやデモステネスや、ペリクレスやアレクサンドロス大帝や、その他無数の歴史上の人物が、彫刻にある真直ぐな高い鼻を天に振り上げて私を見おろすのを感じたのである——「“No”，織田君，チキンは無いです！」と。

2. ギリシャ語は一つ

牧師（世間の常識的な評価）であり聖書の学徒である私がなぜ今のギリシャとギリシャ人に興味を持ち、現代ギリシャ語を学ぶようになったのか——それは一言で言うなら「ギリシャ語はひとつだから」である。

ギリシャの生んだ不世出の言語学者 G.ハジダキスの小論文に「ギリシャ語の一貫性について」というのがある。アカデミアのギリシャ方言辞典を編集するコンドソプロス氏（日本名近藤三郎）の好意で、この絶版になった小冊子を一読する機会を得て以来、私は自分がかねて考えていたことがさほどのはずれてはいなかったことを教えられて喜んだ。西暦1世紀のいわゆる「コイナー・ギリシャ語」の文献であるパウロの手紙やヨハネの福音書を生きた文章として読むためには、その背景になっている古典文学の知識が役立つだけでなく、今のアテネの話し言葉や現代文学を含む現代ギリシャ語の知識が、その理解を裏側からも支えてくれる筈である。

現代ヘブライ語のように人工的に復活させた国語は別として、歴史上断絶

なしに使われて来た国語の中では、三千年以上にわたる使用年数の割に最も変質がなく、崩れの少ないのがギリシャ語であると言われる。それは単にホメロスの使い慣れた“**No**”のジェスチュアが今も変わらずに生きており、**ananevo** という動詞が現に固い文章では使われる（会話では **arnyeme** と言うだろうが）ということだけでなく、ギリシャ語動詞のテンスの発想や、特に新約聖書以後の統語法の基本的な考え方は十分に現代ギリシャ語の中に生きているということである。

この意味で、アテネの日刊紙 **Kathimerini** や **Ta Nea** の社説を読むことも、フォンタナレコードからナナ・ムスクリの歌うバラードを聞くことも、また **NHK** テレビから収録した国立劇場公演「オイディプス王」のカトラキスの名せりふに繰返し耳を傾けることも、そのままヨハネ福音書やローマ書の思考パターンの中へ自然に入り込むための準備体操になるのである。

3. ギリシャ人の「子ほめ」

落語に「子ほめ」という出し物があるが、幼児の愛らしさをほめて人を喜ばせる心理はギリシャ人も変わらない。“**Na mi vaskanthis!**”（まあ、かわいい赤ちゃん）という慣用句は、聖書の学徒にとって、ガラテヤ書 3:1 の使徒パウロの言葉 **Tis ymas evaskanen?** に側光を投げかける。**vaskanya** は嫉妬をこめた悪意ある視線、**vaskaino** はそのような眼で見つめることを言うが、**Na mi vaskanthis!** は「あまり羨みの視線を集中されて、人間のうらみの毒に当って病気になったり、早死にしたりすることのないよう」という **wish** である。これは幼児だけでなく、美しい娘さんへのお世辞にも使うらしい。アリストテレスによるとこのような「邪視」の毒消し薬は芸香だそうだが、現代ギリシャ人なら **Skordho ya kako mati** (邪視よけの妙薬はニンニク) ということになっている。

キリストの使徒パウロは、もちろんかかる邪視の効果をうのみにしたわけ

ではないが、「いったい誰が君たちを邪視の毒で当ててしまったのか (evaskanen) ?」と言った時、彼の使った動詞には古典以来のギリシャ人のこういうセンチメントが100%盛られていたに違いない。パウロの気持は恐らく「あれだけ人も羨むような、ひたむきなキリスト信仰を初めは持っていたことさえ自分でわからぬとは！ ガラテヤ人諸君、これは誰かの嫉視の毒が君たちにまわったとしか考えられない」と言うことにある。このことに気づいてみると、教父クリソストモスの残した謎のような註の意味もはっきりしてくる。日く、「パウロはこの叱責を決して賞讃抜きでしたのではない。これはまさに彼らが以前には羨望に値することをしてきた事実を示すからだ」。

ギリシャで新約聖書の言語を研究することの価値について多くの人は懐疑的である。確かに、現代の最先端を行く聖書学の知識、最新の神学の修練という点では、アテネの大学もテサロニキの大学も最適の場ではないかも知れない。これは新約聖書学に限らず、ホメロスやプラトンの研究についても言えることであろうと思う。

けれども、もしギリシャ人にまじってギリシャ文学を学び、またギリシャ語の聖書を研究することに何らかの価値があるとすれば、それは恐らく、ギリシャ語で物を考え話す過程を通して、ギリシャ人の三千年の遺産にじかに触れながら、ホメロスからエリティスまで一貫した「ひとつのギリシャ語」の流れの中に自分を置いて見ることであり、たとえば、聖書学徒の場合なら、自分の扱う言語を単に「コイネー・ギリシャ語」という「コマ切れ」としてでなく、ホメロス以来話され続けているギリシャ語の滔滔たる流れの一断面としてこれを掴むことにあると思う。

4. Elytis の詩から受けるショック

とは言え、「ひとつのギリシャ語」の流れはあまりにも大きくまた深い。人はこの流れの中に身を置く時、数年の留学や二十数年の独学で身につけた

自己のギリシャ的教養がいかに浅く薄っぺらであるかを否応なしに知らされる。私の場合、このことを徹底的に思い知らせたものはオディセアス・エリテイスの詩であった。

ノーベル賞詩人 Odhysseas Elytis の代表作 *To Axion Esti* は第一部 *I Ghenesis*, 第二部 *Ta Pathi*, 第三部 *To Dhoxastikon* の三部に分かれた連詩である。詩人はその中で自己の魂と祖国ギリシャの地とを常に二重写しにしながら、その苦難に満ちた誕生と戦いと未来の希望とを歌う。Andreas Karandonis によればそれは「無数の楽器で奏でられたギリシャ的樂觀主義の交響曲である」。

カランドニスの言う「無数の楽器」を構成するのは、たとえばビザンチン聖歌の底を流れる韻律と響き、ソロモスからパラマスを通して作り上げられたギリシャ近代詩の伝統であり、しかもその語彙のひとつひとつには（固有名詞や植物名の羅列と見えるリフレーンの中にも）実に「イリアス」以来三千年のギリシャ語が運んで来た内容のすべてが、あの驚くべき“**No**”のジェスチュアと同じように生き続けている。

テオドラキスの作曲指揮によるオラトリオ、*To Axion Esti* に耳を傾けながら私は、果してこの中にパウロやルカを通して流れついているものはないか……イエス・キリストによる贖罪と和解の福音に使われた言葉を、川上と水源からだけでなく下流の水の輝きの中からも確かめることができるのではないかと、真剣に耳をそばたてる。それは言わば、私がエペソ書や使徒行伝の言葉の世界に入り込むための一種の **warming up** なのである。

(1981/09/01)